

難治性口腔潰瘍により摂食嚥下障害を呈した症例に対し
口腔状態の改善と退院後を想定した食支援を行った一例

医療法人春風会 田上記念病院 リハビリテーション部
○樺山翔太 持増健作 杉浦優希 久保かおり 坂口真理
田中精一 川上剛 立石繁宜 中村浩一郎

【目的】

本症例は大脳皮質基底核変性症による認知機能障害を呈し開口障害となり、口腔ケアの不十分さから難治性口腔潰瘍を発症。それに伴い摂食嚥下障害を呈した症例に対し、多職種で口腔状態改善と退院後を想定した食支援が有効であった一例を報告する。尚、本研究は当院倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【方法】

X年11月に前医にて難治性口腔潰瘍と診断され入院。12月にリハビリ目的にて当院地域包括ケア病床入院。入院時の検査結果はKTBC:42点、OHAT-J:12点。嚥下機能は問題なく、口腔状態の低下が著明であったため、状態改善に焦点を絞ったアプローチを行った。食事提供方法は、口腔内刺激を抑える目的でミキサー食半量を常温で提供し補助食品を追加した。また、重度潰瘍を認めた口腔内右側に刺激を与えないよう小スプーンを使用し、口腔内左側に食物を挿入する介助方法を病棟スタッフに周知した。さらに歯科と連携し定期的な評価を行い、Ns、DH、STの口腔ケアの時間を分担。開口障害にはバイトブロックを使用した。患部にはステロイド薬入り軟膏を使用し口腔内保清を行った。

【結果】

入院から30日後には口腔内潰瘍は消失。退院先がグループホームとなり施設で提供可能な食事形態にするため、粗刻み食へ変更。入院から41日後には普通食の提供が可能となった。最終評価はKTBC:52点、OHAT-J:1点。

【考察】

本症例は入院時に口腔状態の低下が著明であったが、退院時には普通食の提供が可能となるまで口腔状態の改善が得られた。口腔状態の改善と転帰先に合わせた食事形態の提供を可能とするためには、多職種間で情報共有を行い予後予測と目標設定を行うこと、また、焦点を絞ったアプローチ、専門職による頻回な介入が重要であると認識した。